

<翻 訳>

南部イタリアの<新しい>恩顧主義

——カターニャのキリスト教民主党

マリオ・カチャッリ

(カターニャ大学, イタリア)

フランク・P・ベッローニ

(バージニア州立大学, アメリカ)

佐藤 俊 一 (訳)

1. 旧い恩顧主義と新しい恩顧主義
 - 1-1. 新しい恩顧主義の強さと弱さ
 - 1-2. 費用の肥大化
 - 1-3. 新しい恩顧関係
2. 大衆恩顧政党：新しい恩顧主義の道具
 - 2-1. 大衆恩顧政党のモデル
 - 2-2. 大衆恩顧政党の構造と作用
 - 2-3. 周縁部と全国的体制内における大衆恩顧政党の条件と機能
3. 新しい恩顧主義と発展

<訳者付記>

政治的^{クライエントリズム}恩顧主義は、異なった二つのタイプをとりうる。すなわち、名望家の恩顧主義と現代大衆政党のそれ（あるいは官僚制的恩顧主義）である。アレックス・ワイングロッドが初めて政党を基盤にした恩顧主義の定義を提起し、このモデルを南部イタリアのキリスト教民主党（DC）の分析へ最初に適用したのはシドニー・タロウであった（Weingrod, 1968: Tarrow, 1967）^(訳注1)。しかし、おそらく恩顧主義の一方のタイプから他方のタイプへの転換に関する最良の説明は、あるシチーリアの政治家が提示したそれ（Graziano, 1976: 149 に引用された）^(訳注2)であろう。

〈恩顧主義〉とは……もはや古ぼけた言葉であり、それはやがて他の言葉に取り換えられなければならないでしょう。というのも実際この言葉を耳にすると、名士からもらう推薦状を思い起こしますが、確かにこの推薦状でやつは、このシチーリアでは今でも立派に残っており、しょっちゅう横行している一種の慣例です。しかし、今日ではその数は徐々に少なくなってきたと申せましょう。少なくともここ15年のあいだに、恩顧主義は、その性格を変えてきたのではないのでしょうか。それは、昔ならタテのつながり、すなわち名士から依頼者へとおりてゆく上下の関係であったが、いまでは、左右両ヨコの結びつきがそれにとって代るようになってきたといえましょう。それは、今日では、包摂的（社会的）諸範疇、特定利益間の連合体、（民間企業の）従業員の諸集団、公務労働者もしくは地域産業の従業員の数多くの集団に関連しています。それは、組織的、効率的な大衆恩顧主義といえるもので、法律、委員会立法（種々の議会委員会によって制定された法律）、例外規定、緊急措置によって、さらにはもはや個人に対してではなく特別の便宜を計られている集団の多くの成員に対して与えられる補助金や利権から成り立っております。この強大なマシーンを動かすためには、キリスト教民主党はいつの時代でも党員を権力のあらゆるレベル、あらゆる重要な役職に配置しなければならなかったのであります。……〔今日、恩顧主義は、〕大規模な諸集団と公権力との関係と申せましょう。

1. 旧い恩顧主義と新しい恩顧主義

様々な研究は、急激な都市化、農業から他の経済活動への労働力移動、広範な人びとへのマスメディアの浸透のような巨大な変化にさらされている社会政治システム内の恩顧主義の形態に転換が生じていることを指摘してきた。そうした転換期には、有力な〈名望家〉と伝統的な庇^{パトロネージ}護に依存した旧い形態の恩顧主義が、大衆的顧^{クライエント}客連をかかえたパトロン組織を支柱にする恩顧主義に取って代られる。

この過程がカターニャのDCに生じたのは1954年から1960年にかけての時期であり、それは現在のキリスト教民主党の権力システムの性質にた

えず影響を及ぼしてきた。この時期に、新しいタイプのリーダーシップがDC—その権力は、彼らリーダーがあみ出した現代的形態の恩顧主義へまさに依拠している—内部に現われた。かくして、密接に関連した二つの事象が同時に生じた。(1)、現代的な大衆基盤政党が創出されたこと、(2)、カターニャでは、新しい政治エリートの統制と指導のもとで別種の権力システムが形成されたことである。

これらの発展は幾つかの要因に促された。すなわち、イタリア政治システムにおける優越政党としてのDCの確立、南部で大衆政党を組織しようとするDC自身の努力、国家とその公的諸制度の機能の拡大、そして南部のための大規模な開発計画への着手である。これらのうち後の二つは、カターニャのDCに特別な意義をもつ。というのも、それらには、新しい恩顧主義的システムの構築に従事した人びとにとって明らかに大きな価値をもつ大量の公金と他の国家資源の配分がともなったからである。

カターニャにもかつて存在していたような〈旧い〉恩顧主義は、パトロンと顧客との大きな不平等をもって特性化される、正真正銘の〈名望家〉の恩顧主義であった。そうした名望家が享受した尊敬は、貴族や大土地所有者、専門家（判事、弁護士、大学教授）としての彼らの身分に由来した。名望家たる彼らの地位—彼らが受けた尊敬とともに—は、彼らが受諾を選択しえるどんな政治的立場とも無関係に、彼らには確立したそして多かれ少なかれ永遠的な事実としてみなされると同時に、彼らの随従者にも受け入れられた。さらに、経済的資源を含む彼らが統制したどんな資源も、公権力とはほとんど関係をもたなかったが、その代り、彼らの個人的な富や社会的声望、威信から一つまり自主的かつ自己的裁量的に活用することができる高度に永続的なあらゆる資源からもたらされた。最後に、名望家の旧い恩顧主義は、組織が欠如していたり、あるいはきわめて脆弱なところですら繁植することができた。

他方、新しい恩顧主義は、最も根底的な意味で組織に基づく。それは、顧客への便益配分と引き替えに彼らから買うことができる支持によって維持される、キリスト教民主党装置の恩顧主義である。アパラッティキ（apparatchiki）、すなわち現代的な大衆基盤政党を構築した党员（彼らの特性は以下でのべられるであろう）こそが、新しいパトロン達なのである。

パトロンとしての彼らの存続は、党装置の存続と同じく、彼らの顧客の投票と合意にかかっている。その合意は、党が分与する有形的便益との引き替えによってのみ獲得される。そして、まさに交換のこの新しいシステムにこそ、職業的な政党政治家が庇^{パトロネージ}護機能の点で何故に、どのようにして旧い名望家にとって代るようになったかの説明が横たわっている。しかしながら、ただ担い手のタイプが変わるだけではなく、媒介手段の性質と同様にまさに恩顧的交換のルールも変わるのである。

新しい恩顧主義は、形成そのものからして、現代的で保守的な大衆基盤政党（カターニャのDC）と結びついている。それは政党組織と公的資源の機宜に応じた使用から生じ、あるいはそのことに依拠する恩顧主義である。新しい形態の庇^{クライエンティリスト}護者は、旧い名望家の資源が大衆社会のニーズを、つまりほんの数年の間に急速な、時には爆発的な都市化を体験する中小都市社会のそれを満たすものではなかったがために必要だったのである。新しい恩顧主義は、それゆえに、大規模な社会変動にともなった諸要求の質量的増大へ対応するために生じた国家の活動領域の着実な拡大と結びついている。そうして公的資源を獲得しうる基本的手段こそが、キリスト教民主党の装置なのである。DCは中央政府における支配的勢力である。そうであることによって、それは公的諸機関と国家諸資源への統制力を享受する。これら資源の配分は、しかしながら、党内政治の動力学を大いに作動させてきた。すなわち公的資源は、DC地方単位の競争状態に応じて国中至る所にバラまかれるのである。

かくして、カターニャDCに現われた新しいタイプのパトロンは、階級的出自とともに政治的志向性の点で旧い名望家と相違する。庇護の新しい提供者は、中間階級の下層か中間階級の来歴を有するものであり、彼らの党派的先達のような政治に対する副業的接近とは対照的に、専門的職業人として政治に賭ける。政党政治へのかかわり合いは、偶々の活動であるどころか生活様式なのである。つまり彼らは全くもって政治のために、そして政治によって生きるのである。

1—1. 新しい恩顧主義の強さと弱さ

新しい恩顧主義が、顧客への便益を、つまりそれが中心部すなわち国家

から引き出す便益を顧客に供与するのに大きな能力を有していることは明らかである。しかし、このようなことは、新しいパトロンの（顧客との関係における）立場が顧客との関係で旧い名望家を特性化した立場以上に堅固であることを意味しない。実際、多くの側面で、新しいパトロンの立場はかなり脆弱である。

だが、一つのことは明白である。すなわち新しいパトロンの出自的地位は、今日の恩顧主義ではそれほど重要でないことだ。現代的パトロンの究極的声望は、今や彼の党職歴（とともに変化し）にかかっているのである。当初、伝統的パトロンのような資源を有していなくとも、^{パーティ・プロフェッショナル}職業的な政党人でパロン志望者たることの成功は、とりわけ個人的な先導力にかかっているように思われる。さらに、権力と地位を獲得する手段として政治に頼る人びとの数が著しく増大してきたため、かなりの競争がある。その結果、名望家から政党組織へという恩顧主義の基盤の移動は、パロン階級のまぎれもない（少なくとも部分的な）＜民主化＞となる。すなわち、何程かの才能や党との繋がり、大きな先導力を有するものなら誰でも＜パロン資格＞を望みうるのである。

1—2. 費用の肥大化

この状況は、ひるがえって、新しい恩顧主義の他面の特徴、すなわち費用の絶えざる肥大化の原因となる。この肥大化を説明する要因は捉え難いわけではない。というのは、キリスト教民主党にとっての潜在的な顧客予備軍には限界があることと、パロン資格を渴望する人びとの数が著しく拡大してきたがため、顧客市場統御のため競争がかなり激化してきたからだ。このことは、それぞれのパロンが自分と競争するパロン以上のものを提供しようとするため、やがて、競争入札で支持を求めるタイプを生み出した。ここに至ると、原因と結果の連鎖には終りがなくなる。随従者の支持を求める公開の、しばしばバカげた入札は、パロン階級に対する顧客の敬意を希薄化するのに大きく寄与してきた。そうして、パロンに対する民衆的な尊敬の転変とともに、顧客の側の消えることなき負債—永続的な報恩—の時代はほとんど昔日のものとなる。パロンと顧客との関係にそうした無形の補強物を欠くことにより、新しいパロンは随従者を

確保する手段として有形的な便益の配分にますます頼らざるをえなくなるのである。このことは、パトロンをして、顧客と同様に政党装置（そして、その内部における彼自身のパトロン）に対するヨリ一層の依存をもたらす。そうして、これらの事実が良く認識されるのは、新しい顧客達の序列化それ自体において他はないのである。

上述のこととは別に、新しい恩顧主義の費用は、また顧客によるあからさまな諸要求の絶対的増大によっても膨張せしめられてきた。このことは三つの要因がために生ずる。すなわち、パトロンは顧客なくしてはパトロンとして存続しえないという単純な事実、パトロン数とパトロン間競争の拡大、それに顧客の〈政治意識〉（すなわち、前二者の事実に関する自覚）の成長である。顧客の諸要求の増大は、それゆえ、恩顧主義的交換が現に生起している条件下での心理的变化を部分的にしる写しだす。かくして、新しいパトロンが利用しうる有形的資源の顕著な増加にもかかわらず、彼らの立場は絶えまなく増大する随従者の諸要求を継続的に処理する能力にかかっているがため、旧い名望家のそれほど堅固ではないのである。あいにくにも、無尽蔵な財源はありえず、そして、巻き込まれた人びとすべてに不幸な結果をもたらす大規模な負債が累積し始めた。

以上のことからして、新しい恩顧システムにおける交換の全般的条件は変ってしまった。庇護の分与は、今や公的資源への接近に依存し、そのために政党が基本的導管として役立つのである。かくして、政党装置の新しい専門家が新しいパトロンになることになったが、しかし（すでに述べたように）、その数が着実に増加するとともに、パトロン市場全般も民主化された。このことは、パトロンが顧客の支持を求めて競争し始めるやいなや尊敬と敬意の要因が極少化され、したがって、パトロンと顧客との関係の心理的性格を変えたがゆえに、量的と同時に質的な発展を示す。新しい恩顧主義におけるパトロンと顧客との契約条件は、今や取引きという暗黙の要素に基礎を置く。すなわち、それらの条件は交渉と再交渉に左右されるのである。さらに、新しい顧客は、パトロンから提供されたり受けたりした便益を計測する能力を身につけることになったし、それにたとえ支持の提供と引き替えにどんな見返りが受けとられるべきかの客観的基準はないとしても、別のパトロンが何を提供し、返礼に何を求めるかを比較する

ことは疑いもなく可能である。もはやパトロンは門衛の役割を、すなわち政治・行政生活の多側面に関する情報の排他的保有者—はなはだしく不均衡な交換のタイプ、つまり顧客へ不断の義務を負わせるのに必要なタイプを永続化するためにはきわめて根底的なものであった—の役割をはたしえないのである。

それゆえ、前述の理由にもかかわらず、パトロンへの分配圧力は彼らの伝統的な守備範囲をはみ出し、そうして顧客連を維持する費用を高める。競争価格高騰の過程は、^{パーティー・テイクエニヤンズ}党活動専門家でパトロンであることの当初の成功を保証したにもかかわらず、それはまた新しい権力構造の弱さの要素となり、インフレ過程が継続するにつれて、その影響はだんだん重くのしかかってくる。

新しいパトロンにとっての根本的な難題は、拡大する諸要求の費用を手当する資金を見つけ出すことにある。すでに示したように、新しいパトロンの社会的出自が如上のごときであるならば、彼は恩顧的分配過程に注ぎこむことのできる私的資源を有しないであろう。それゆえ、新しいパトロンの資源はすべて公的にならざるをえないし、実際、公的諸機関の歳出は著しく増大してきた。その結果、周知のごとく、中央・地方の公的諸機関の赤字は近年とりわけ増大してしまった。われわれが研究した幾つかの事例では、その赤字は、年次歳入が今や累積負債の利子を支払うだけに当てられるような次元に達してしまっている。

インフレ作用は新しい恩顧主義に特有のものである。それはインフレの自己拡大と自己永続化という悪循環を引き起こす。それはヨリ一層の財分配をとという圧力をうみ出し、パトロンの立場上の連帯を掘り崩し、彼らが生き残るのに必要な投票獲得のための競争を激化する。恩顧主義の費用膨張は、かくして、イタリア経済全体の同じようなインフレ過程に直接かつ重大な影響を及ぼしてきたのである。

このすべての根源は、新しいパトロンの従来とは違う政治活動の母体とタイプにある。党活動専門家が1950年代後期に活動し始めた時、地方権力構造は旧い名望家に統制されていた。それゆえ、何らかの資源管理を求めた新しいパトロン達の面々にとっては、その資源を創り出す必要があった。そして党员達がまさにそのことを行ったのだ。すなわち、中央政府か

ら獲得した資源を利用しながら、彼らは旧い名望家が立ち打ちできない便益〔配分〕システムを創ったのである。

1-3. 新しい恩顧関係

恩顧主義の伝統的形態は、すでに述べたように、非常に不均衡だが忠義と尊敬に富み、顧客を一生拘束しがちであった。この形態は、交換条件の絶えざる再交渉や、忠誠の対価を拡大しようとする顧客側の企てがしばしば成功することをもって特性化しうる現在の形態に取って代わられてしまった。かくして、パトロンの見地からすると、そうした現在の状況では、最小限の資源消費をもってできるだけ最大限の投票を確保することが根本的に重要であり、逆に顧客からすると、自分の〈忠節〉をできるだけ最良の方法で売るにはどうしたらよいかを見分けることが必要なのである。別の言い方をすると、パトロンは顧客の依存を継続的なやり方で確保することを目的にするが、しかるに顧客は対照的に、賭金を定期的にアップするゲームを演じうる限り、パトロンに対する永続的などんな債務をも回避しようとするのである。

顧客は全くパトロンの思うがままになるものではない。顧客は何とかして自分らを防禦し、私利を図ろうとするために、個人としても集団としても、その実現を企てうるのである。個人的には、投票は基本的な資源である。投票は、ユスリの手口のように、パトロンへ新たな要求をつきつけるのに使うことができる。顧客の狙いは雇用の安定化、賃上げ、労働条件の改善や昇進であるかもしれない。集団や派閥間での絶えまない権力競争である公職選挙あるいは党内選挙のいずれにおいても、顧客の手法は、彼の投票（そして、彼の家族も原型的な恩顧的交換の一員に含まれた場合には、おそらく家族の投票）を保留する嚇かしである。公職選挙で顧客の優先的な投票を失うことは、パトロンの再選を脅かすであろう。だから党内でも、同様の喪失は、地区や市町村、^{コミュニケーション}県などの集会における対抗的パトロンに対する彼の立場を弱体化するであろう。いうまでもなく、もし顧客が彼のパトロンの直接的対抗者へ支持を切り替える素振りをみせるならば、この嚇しは一層効果的である。

顧客の集団的武器には、ストライキや占拠、それに公的機関の活動妨害

を目的にした別形態の大衆行動がある。事実、新しい恩顧主義の示差的特徴の一つは、パトロンと顧客との個人的な関係に限定される取り引きから、一人のパトロンと範疇的〔集团的〕な顧客との関係を含むそれへの発展にある。ここにおける斬新性は、パトロンに対する集团的行動を効果あるものにする新しい顧客達の力能にある。しかしながら、行動は集团的であるにもかかわらず、依然として特殊主義的な目標を追い続けてきた。それゆえ、コーポラティブ・アソシエーションズ協調的な諸団体、特にDCのリーダーシップと密接な紐帯をもつそれらは、しばしば顧客―労働者の要求を伝送したり支持する役割を担うことになる。そうした団体は、パトロンと顧客との媒介的役割をはたすにしても、伝統的な恩顧主義に典型的な対面的取り引き（あるいは交渉）に代りうる。この媒体は、人気凋落〔unpopularity〕の危険はもちろんのこと顧客の離反を恐れるパトロンとともに、報復を浴びまいとする顧客―従属者達の両者に望まれるといえる。

新しい恩顧主義のこの側面は、顧客にある決定的な利点をもたらす。パトロンに対する顧客の依存状態がもはや完全に孤立化されたものでないならば、交換の不均衡はある程度縮減されよう。幾つかの事例では、顧客がパトロンから引き出しうる経済的便益を著しく拡大してきたことを示している。理由は、範疇的〔集团的〕な連繋を取り入れることで―この場合、労働組合がとりわけ重要である―顧客の契約上（あるいは威嚇）の権力が増化されるからである。

2. 大衆恩顧政党：新しい恩顧主義の道具

われわれの言わんとすることは、カターニャ〔市〕DC^(訳注3)が、＜名望家＞により集团的に先導された議員政党から職業的な政党人という新しい階級の指導下にある現代的タイプの政党へ転換してきたということにある。問題は依然として、カターニャDCは現代的政党のどんなタイプを表わすのかにある。それをミヘルスとデュベルジェの古典的な＜マシン政党＞や＜大衆政党＞と照し合せてみると、それらのモデルのいずれもカターニャDCを十分に特徴づけるものではないという結論に達した。

カターニャの新しい政党は、古典的なマシン政党と幾つかの類似点を

もつ。すなわち、その両者は＜ボス＞あるいは管理者型の人物を有し、彼らが我がものとする地方権力構造の存続に主として関心をよせ、＜マシン＞を維持する手段として便益の互酬的交換システムに大きく依存する。だが、カターニャDCはきわめて重要な点でマシン政党と相違する。後者とは対照的に、カターニャ党〔DC市支部〕はその中^{ナショナル・カウンターパート}央版の権力構造へ明確に統合されており、党中央の指導において引き受けられたイデオロギー的かつ政策的態度に条件づけられ、そして複合的な〔カターニャ〕党の基礎構造（地区支部組織^{セクシヨンズ}）への公式的な党員登録に常々関心を有するのである。それゆえ、カターニャDCは古典的なマシン政党とは大きくかけ離れるように思われる。

他方、カターニャ党は、大衆政党と幾つかの点で著しく似た所（さしあたり相違点は無視する）がある。すなわち、同党の多様な基礎構造に組織化された大量の公式的な登録党員、党中央装置への同党の依存と中央による統合、補助的団体に対する同党の統制、新しい指導者分子の補充とその内的開発、それに党員の支持基盤から生ずる諸要求を伝送する機構としての同党の役割、である。

カターニャDCによる大衆党員の補充と同党の基礎である数多くの地区支部組織の創出は、大衆政党の諸特性のうちでも主要なものである。過去30年にわたる同党党員の拡大は、無審査の大衆的随従者〔名目党員〕をもたらした。事実、1959年を境に、カターニャ県のDCは、ただローマとナポリの水準には劣るが、イタリアで最高の党員水準を有する一つになった。県内でも最高の増加は県都〔カターニャ市〕で生じたが、そのことは、この周縁部政党の着実な都市化と同様に、地方政党装置におけるカターニャ〔市〕の重要性が増大していることを示す。

党員の大量補充に対する基本的説明は、それ固有の目的に役立てるため一直接的な外的環境に対する統制力を掌握しようとする地方政党の利害との関連で捉えられなければならない。かくして、カターニャDCの大衆政党的相貌は、地方的環境を統御しようとする努力の産物なのである。大衆的〔名目〕党員のこうした特殊な利用（そして、その利用こそが大衆的補充それ自身を説明する）と、それに一層重要なことは、目的達成の基本的方策として恩顧主義という手段を使うことが、大衆政党モデルそれ自体か

らカターニャ党を区別するものなのである。そして、目的（政治的支配）と手段（恩顧主義）とのこの特殊な結合こそが、結論的にいって、われわれがカターニャDCを大衆恩顧政党と特性化するものなのだ。

2-1. 大衆恩顧政党のモデル

多くの点で、カターニャのDCは大衆政党となってきた。高い党員数（名目党員の割合を考慮に入れたとしても依然として高率である）にくわえ、すでに述べたように、それは従来の文献で大衆政党モデル（まずもって、デュベルジェのモデルが想起される）に属する他の様々な特徴を示す。カターニャのDCは党中央に依存し明白に統合されること、同党の周辺に群がる^{コラテラル}支持団体を統制しがちであること、党内部で新しい指導幹部を育成すること、それに党基盤の諸要求を（たとえ特殊主義的、個人主義的で、かつ/あるいは間歇的であるとしても）受け入れる（そうして、おそらく調整すること、である。他方、そのDCは同時に、大衆政党の他の特徴を欠き、後者とは異質な諸点を有する。それらの諸点は、党の組織的基盤である地区支部で永続的などんな活動も展開しえないでいることだ。すなわち、装置指導の指向性が一般党員の政治的成長あるいは彼らの政治的自覚を促すような動員とは無関係であること、選挙活動と権力管理を党がほとんど排他的に占有すること、その結果として、党の指向性は趨勢として主に便益配分の導管たる要請に応じ、そうして最後に、実際のところ大衆補充は主として党装置統制のための止むことなき競争の作用であることだ。

しかしながら、これらの限界にもかかわらず、カターニャでは、[DCは]依然としてきわめて大量の市民を包摂するのに成功している政党であり、そして、それに先んじた名望家の政党や、さらにはマシーン政党と比較すると、様々な水準でエリートと随従者との膨大な接触を可能にする政党でもある。だが、この接触は一連の構造化した交換と仲介を通じて生ずるが、その構造化に応じて、すなわち党基盤に要求されパトロン＝リーダーによってそれに約束された便益が当てにできるかぎり、大衆的基盤は党装置の指導者に永続的な＜委任権力＞を付与する。こうして党は、利益の^{エクスステンデット}樹状的連鎖とその最も根本的な特質である恩顧主義によってそれに授けられた忠誠を基礎に自らを拡大し支配する。そして、実際問題として大衆

政党モデルと異質なこの特質こそが、カターニャDCを大衆政党から区別することになる。それゆえ、前述したように、カターニャDCは大衆政党モデルと幾つかの特徴を共有するにもかかわらず、同党の恩顧主義的側面は明らかにモデルを最もはみ出す特性である。そうして、同党を大衆恩顧政党と付称することでわれわれが強調したいことは、＜大衆的＞よりもはるかに＜恩顧的＞な特質なのである。

カターニャDCが大衆恩顧政党へ転換するには、三つの構成要素—恩顧主義、大衆的基盤構造、公的資源—が活用された。ひるがえっていうと、大衆恩顧政党は新しい政治・行政的階級の利益を促進する道具である。この新しい階級は、それゆえ、党装置の永続化に必要な資源と統制力をもたらす公的諸機関への統制力を獲得し維持するために大衆的恩顧装置を利用する。こうして、全過程は循環的かつ（装置の管理者に）自己奉仕するものになる。

DCの官僚制的恩顧主義は、官庁や公的諸機関ばかりではなく市町村と県の行政を通じて、そして一特に南部では一公金と他の資源の流れに対し党の面々が有する統制力をもって具現化される。これらの資源の流れは、地方黨員達と中央政府における彼らの派閥リーダーとの直接的結合によって保証される。国家の介入は一他の地方に比べとりわけ南部では一社会の政治的領域と社会的経済的領域との差異をなくした。さらに、キリスト教民主党が長期的にわたり政権の座についてきたため、政府は多くの点で同党の道具であり、そうしてこの道具は、同党が公的諸制度と社会との特権的仲介者として働くことを＜許容する＞のである。どんな場合でも、まさに中央から天下る資源の有効性こそが、カターニャにおけるDCの勢力と権力の異常な成長を説明するように思われる。

もし、管理^{クリティリア}そのものがもともと恩顧主義的タイプとなるものならば、政党もまた、その対象となす広く多様な社会的諸階級—＜人民的＞諸階級を含む—に特有な個人主義的あるいは協調主義的な要求（集团的性質のそれではない）を満たすと仮定することができよう。しかしながら、もし、恩顧主義が権力の保持と行使—権力システムの自己永続化を助長するために大衆的合意を固めようとする—の道具とみなされるならば、次の段階で〔必要なこと〕は、このシステムが現実的に誰のおかげで維持され、そして

誰が最大の利得を手にするのかを確定することであろう。第一の仮説は、党を直接に代表する人びと—とりわけ党装置を創り上げ、その支援で指名されたり選出されたりする人びと—のための利益斡旋手段として、政党はその権力を利用するというものである。第二は、政党はその権力を一定の支配的諸階級の利害を守るために利用するというものである。ひるがえって、そうした階級は、功利主義的理由からそれら階級の擁護をいとわない装置の担い手達にとって強力な支持的同盟者とみなされる。カターニャの党装置はこうした一組の利害の双方に应运してきたというのが、われわれの規定である。カターニャDCは、市の支配的諸階級と一体になって統一的な利益ブロックを、すなわち経済的利害を政治的特権と支配という利害に結合する同盟システムを構築してきた。カターニャに関する最近の研究は、過去30年以上にわたりこの過程に包摂されてきた諸階級やそれらの間で生じた交換の性質、それにどんなタイプの関係がブロック内で確立されたかを、明証化してくれる。

2—2. 大衆恩顧政党の構造と作用

中央レベルのDCは、その襍の中に広範囲の異質な諸階級に属する膨大なイタリア市民を組織し包摂する。しかしながら、いったん同党に徴募されるや否や、大衆の参加は主として選挙活動に制限される。この活動の遂行において、党員は党装置と派閥リーダーに嚮導される。大衆党員の効果的な参加の余地はほとんどない。これらの特徴は、DCのみならず他のイタリア諸政党も全体的あるいは部分的に共有するものである。DCの特異性は、一部にはそれ独得の構造的特性から、また、一部には同党がイタリア政党システム内で自称する次のような特徴から生ずる。すなわち、カトリック教徒の代表という疑似独占的な主張、支配的諸階級と従属的諸階級の中の二階級や多階級を仲介する役割、政党連続体の中央にある位置、間断なき政権参加者としての役目である。これらの要素は同時に、特に最初の二つ（もちろん、DCのこれら二点への態度は、歴史的な時期ごとの情勢急迫性と国の様々な地域に応じて異なってきたことが認められるのだが）は、党基盤に対する関心の明白な欠如を浮彫りにしてきた。

大衆恩顧政党の装置は、モデル的には大衆党員を含むいわゆるカピ・

テッセラ (capi-tessera), ^{セクション・セクレタリイズ}地区支部書記, <管理者>というピラミッド形態をとる^(註4)。ピラミッドの基礎をなすのは, 党への参加がなく, それゆえに容易に操作されやすい (おおよそ) 150 万の党員である。第二の水準は, カピ・テッセラ (^{メンバーズ・ヘッズ}党員長) から構成されるが, 彼らの主要な仕事は何かにつけて党への名簿登録を督励し, 次いで新しい党員がその支持を特定の集団あるいは派閥へ, すなわちカピ・テッセラが属するそれへ<与える>ことを確保することにある。これらのカピ・テッセラが, 新しい党員の家族とか借家人を徴募し, 彼らを自分らの派閥へ吸収しうるのである。まさにこれら徴募官の^{アクティヴィズム}積極主義こそが, 實際上, 名実ともに, DCの大衆的基盤の拡大を説明するものだ。さらに, そうした徴募の特別なねらいは, 常に自分ら自身の権力集団や派閥—そして, その内部で, たとえ小規模でも, カピ・テッセラ自身が恩顧的リーダーとなるために彼への個人的随従—を強化することにある。党員数は, 実質的であれ名目的であれ, 地区支部を通じて究極的に党装置を統制することになる面々の<委任権力>を確定するがゆえに, カピ・テッセラ活動家の役割と能動性はピラミッド的権力構造でかなりの重要性をおびることになる。カターニャDCの場合, たとえば, 党員徴募と地区支部発展への統制, それに諸地区支部を指導したり県議会ですれら地区支部 (したがって地区党員) を代表するのに直接責任を負う人びとへの統制は, 新しい政治的階級による党指導さらに公的権力の獲得に欠くことのできない局面となった。結局のところ, まさに底辺へと拡大するこの統制は, <管理者>と彼の輩下にとり権力の基本的な道具として役立つのである。

われわれの分析によれば, カターニャにおけるDC地区支部の活力条件を否定するような基本的要因は次にある。(1)徴募パターンが党基盤に対する装置の統制をきわめて容易にし, 随従者の政治的自覚化を阻止する規準と技法を有すること, (2)基盤の参加がもっぱら選挙の日程と結びついた散発的な高^{アクティヴィズム}揚に狭められること, (3)下層党幹部の政治的向上が彼らのリーダーとの特殊な結合に帰因して停滞的水準にあること, である。こうしたことが, 同党へ忠誠が向けられる基礎なのである。

明らかなことは, 地区支部を指導し統制する人びとこそが最も直接的な責任者であると同時に, 党基盤状態のこうした否定的実情から最大の利益

を引き出す人びとでもあることだ。地区支部の統制が＜管理者＞の権力にとって決定的であるがゆえに、大衆恩顧政党のピラミッドで最も重要な媒介的構造は地区支部書記である。党〔支部〕事務所を中心に地区の全生活が回転することからしても、地区支部書記は選りすぐられなければならない。

カターニャDCのような政党では、地区支部書記は百から数百〔hundreds and hundres〕の党員を代表するのに十分な責任を負いつつ、彼はそのことを自分が属する派属の支持に利用する。この目的のために、彼は県議会への地区支部代表者の選択権を統制し、行政と政治の公職選における優先的投票を確保しようとする。さらに、彼は党の基盤と中央^{スエーパーオーデネイト}権力構造との、また逆の場合の行政的や政治的な相互作用の管理における中枢的媒体として活動する。このことは、下から生ずるどんな主導権をも、特に些細であれかなり重大なやり方であれ地区支部の内部的権力関係の変革を狙う人びとを監視し、阻止する機会を彼に与える。

カターニャのDC党組織分析から明らかになる極端な個人化と明白な断片化の容態は、県指導機関によってある程度組み直されて秩序づけられる。地区支部の発展や地区支部書記の積極的活動、媒介層に内在する〔パトロンであるとともに顧客でもあるという〕^{コントラスツ}二面性は、後者を通じて、党装置の企図と目的に結びつけられるのである。

^{デモクリスチャン}DC活動党員権力のこのピラミッド構造は、党の内外いずれでも、巨大な星雲状態の利害をかき集めるのに成功する。その中枢である大衆恩顧政党は、かくして本性的に、党をバラバラにする恐れがある異質な、そしてたびたび相対立する利害の圧力に悩まされる。これらの対立する圧力とその亢進を抑えるために、党組織は頂点からの強力な指揮と、恩顧の導管を統制し管理する人びとによって遂行される機能を特定化した厳格な役割分節化を必要とする。その役割は階統的に配列され、党員は彼らを頂点へ結びつける依存関係のタイプに応じ、ピラミッドの様々な水準で役割があてがわれる。

頂点に座するのが＜管理者＞、つまり権力装置を創り出し、党の統制を手中にする集団のリーダーである。＜管理者＞とは、彼の＜閥族＞（党の指導と媒介構造において彼に最も忠実な連中）の支援をもって、長期間に

わたり党全体への確固とした統制保持に成功する人物である。われわれが彼を〈管理者〉と称してきたのは、彼の能力が、装置とその権力を維持するというかの当然の利害を確保するようにしながら、多様で特殊主義的利害をも管理するものでなければならないからだ。彼に集権化した意思決定、統制力の巧みな駆使、便益配分の周到な規制をなす〈管理者〉だけが、相対立する利害を仲裁するとともに大衆恩顧政党を保持しうるのである。それゆえに、彼は政党装置と権力システムの両者を営利企業のように指揮監督しなければならない。政党装置やその集票力、地方（それに中央）レベルでの政府に対する党の統制から生じる諸資源を利用することにより、ローカル・パーティー党地方支部の〈管理者〉は彼の影響力を都市の政治的、行政的、社会的生活のあらゆる決定的部門へと徐々に拡大する。このようにして、彼の党支部はそれ特有の組織的限界をはるかに超えて広がる複合的な権力装置の一部となるのである。

2—3. 周縁部と全国的体制内における大衆恩顧政党の条件と機能

社会的、経済的、政治的という三組の基本的条件が、大衆恩顧政党の出現とそれが優越的地位を獲得する能力へ寄与するように思われる。第一に、そうした政党は〈境界的地域〉という文脈にある所で出現するように思われる。つまり、急激な都市化をこうむりながら前契約的社会関係の残存によって特徴づけられ、中央政府に依存し、その介入を必要としているほとんど産業化していない経済的体制内にある地域である。第二の条件は、どんな集团的利害の自覚化も発展させることはなかったし、それゆえ政治的要求を集团的に表出することもなしえず、そうして政党が首尾よく支配し操作しうる解体された社会大衆の存在である。最後の条件は、〔政党をとりまく〕環境（金融及び建設投機業者、〈補助金受給〉の建設業者、専門家、行政官僚）には明確な〈利害〉が存在するのだが、政党はそれ固有の利害を促進するために自己規定した代表という役割によって〈管理された〉均衡に〔諸アクターを〕みな縛りつけつつも、同時に（やはりそれ固有のエゴイズムに動機づけられるのだが）ヨリ広大な社会の解体化を維持することである。

このような状況において、大衆恩顧政党はピラミッド構造を呈し、中心

部からの資源を散布する唯一の導管として働くようになる。こうした資源（また地方に有益な資源）の選択と配分は、現存の社会システムの均衡を保持するという目的を達成しなければならない。現存のシステムは不平等を有するシステムであり、ずっとそうであるに違いない。したがって、政党自身もこの不平等を表出することになる。党のリーダーシップは、それを永続化するにはどうしたらよいかを把握し、できるならば特殊主義的な利害を強調したり、集団的タイプの要求を無視することによって新たな不平等を創出しなければならない。このことは、単一の権威主義的で専断的なリーダーの指導下でのみ遂行可能であろう。集権化され統制を思いのままに駆使したり、便益の思慮深い施しによって、〈管理者〉は困難な均衡（あるいは不均衡）を維持することができる。このタイプの管理における弛みは、どんなものでも、権力の座にある政党に取り返しのつかない結果をもたらす、多面的で継続的な対立へと装置を巻き込むことになる。

以上のような大衆恩顧政党は、1950年代から1970年代初期にかけてカタリーニャで発展し作動したDCの特徴を示している。同党〔カタリーニャDC〕は、堅固で深く根張りした〈権力システム〉—それは同党によって創出され、ドロテーイ派^(訳注5)に嚮導されたにもかかわらず、その両者によりはるかに大規模である—to組み込まれてしまった。われわれの確信するところでは、過去20年の間に、DCは他の南部諸地域でも、すなわち著しい社会的^{デスタンシイズ}辺境化と利害の特殊主義的断片化が〈管理者〉とその〈閥族〉に嚮導された大衆恩顧型政党を促す地域でも、同じような構造と機能を呈するようになった。ナポリのガーバ、アヴェリーノのデミタ、パレルモのジョーイア、メッシーナのグッローティによって構築された恩顧的メカニズムがそうした事例といえよう。南部の全県では、すべての地域ではないとしても、1960年代の間にDCの権力者は自らの地域を支配し、全国的レベルで彼の同輩と交渉しうる唯一の重要なリーダーであると認められてきた。したがって、特に南部地域におけるDCの権力システムを論ずる場合、しばしば言及されることは、その〈封建的〉あるいは少なくとも〈^{フェデラル}割拠的〉構造であり、それに各々確保した政治的^{テリトリイズ}支配圏を統制する〈^{パロソズ}地方有力者連〉である。だが残念なことに、こうした〈地方有力者連〉の出自と彼らの統制技術が、ここで述べたモデルにどの程度合致するかを

決定する経験的証拠をわれわれは持ちあわせていない。

3. 新しい恩顧主義と発展

南部の政治文化は、政治的恩顧主義の存続及びその多様な派生物と明らかに共鳴している。そうしてDCは、カターニャにおけるその組織と作動の点からみると、この伝統に深く影響されてきた。同党が合意を創出し、その権力基盤をしっかりと確立するのに使ってきた技術は、巻き込まれた住民がそのような技術を文化的に受容したがゆえに効果的であった。しかしながら、政党というものは、恩顧主義にきわめて寛大な政治文化と慣習に関与し、変えることのできる歴史的道具でもありえたのだ。大量のDC党员と投票者にとって、同党はより多産的なタイプの政治的な団体と活動を求める彼らの嚮導者として働きえたであろう。ところが、DCは既存の社会文化的な編成に順応した。そうすることによって、それは現存文化の頹廢的な潜在力を一層顕在化するのに貢献してきた。DCは市民組織の革新的要素であることよりも、むしろ単なる官僚制的〈マシーン〉であることに自己充足的であった。そして、党マシンはその作動において、大衆の後進性を非常に限定された側面でのみ改革しつつも、代りに彼らをむしろ分断化かつ断片化し続けながら、南部の社会的で政治的な解体化を促進してきたのである。

かくして、DCの現代性—その大衆政党的諸特性—は表層的現象である。それは市民社会の成長を増進するのに失敗したし、その民衆的随従に対して真のリーダーシップを全く発揮しえなかった。結局のところ、大衆が経済的そして政治的な危機の時点で立ち上る場合、彼らはその政治的要求を積極的形態でいかに表出するかを全く教導されてこなかったもので、ただ怒りと抗議を表出するだけなのである。そうして大衆恩顧政党は、大衆的随従を現代的で民主的な勢力へ転換する機会を無視してきたがため、抑圧的環境下のこの随従者がなしうることといえば、自らと地方全体を尻ごみさせることであった。

それにもかかわらず、大衆恩顧政党は、産業化なき急激な都市化、地方から流入しつつ定職の展望がない社会階層の無軌道な流動化、非生産的な

中間階級の増大、能動的な住民の減少、それに極貧と吹き溜り^{マージナリテイ}の谷間の固着化を経験してきた南部イタリアの巨大都市を統治しうることを自ら証明してきた。そして恩顧政党の能動性は、変動する経済には非常に重点を置いたにもかかわらず、政治的変動に対する嚮導ではほとんど全くといってよいほど全国的〔政治〕システムの均衡を保持するという指令に応じてきた。したがって、それが促進したことは経済の活力化と失業の構造化であり、それらこそが実際には（他の南部地域と同様に）カターニャを経済権力の中心部に対する依存と従属状態に置き続けることへ寄与してきたのだ。しかも同時に、それは対立の爆発を和らげたりズラしたり、ないしは対立を協調的な対抗や個人的な競争へ転換することによって社会的緊張を抑制することに成功してきた。こうしたやり方で、カターニャのDCは、イタリア〔政治〕システムの全体的安定とその内部における一定の諸階級の支配に貢献してきた。かくして、イタリア南部社会の統制は、戦後期の大衆恩顧政党へ歴史的に課せられてきたことのように思える。事実、このことは少なくとも最近まで＜DCの主要な政治的任務＞だったのである。

イタリア中に噴出し続けてきた資本主義の不均等発展とその変化という枠組の中で、大衆恩顧政党はカターニャのような依存的で周縁的な諸地域を統轄する課題を引き受けてきた。これらの（過度に都市化したカターニャ市のような）地域が全般化すればするほど、カターニャDCのような政党一もはや地方的な組織表現としてではなく、むしろ中心・周縁軸の媒介的水準に位置づけられなければならない政治的構造一の現存がますます必要になる。かくしてカターニャDCは、中心部との強力な紐帯に縛りつけられた〔周縁部住民にとって〕不可欠な媒介層に位置することになるが、そのような紐帯は中央の派閥リーダーあるいは中央の政府と官僚制の意思決定中枢とともに創り出される。DCは、中央政府への統制から生ずる資源と機威をもって、南部地帯を資本主義発展の作用として統治し統制する。

われわれは、カターニャに現存する〔党〕官僚制的恩顧主義に関し大量のデータを収集してきたが、その考察をもとにして、恩顧主義システムがイタリア政治システムの中で機能している点について以下のごとき一般的留意点を提示する。恩顧主義を権力行使や合意集約の一様式として、はた

また新住民を社会政治システムへ統合する手段として検討する人びとは、しばしば恩顧主義に肯定的な判断を示す。彼らを痛感させるものは、対立を制限し、かくして社会の変動を規制し安定化する恩顧主義の能力である。確かに、経済的、社会的条件が恩顧主義にそうしたタイプの行動をとりやすくする環境においては、その実践は効果的な規制メカニズムでありうる。潜勢的な緊張を統制することにより、それは統治階級の権力を強化し、(単に地方システムだけではない) システムの均衡化に貢献しうる。恩顧主義のこうした見方が、カターニャで、またおおよそ南部の他部分でも裏付けられることをわれわれは認める。しかし、注意しなければならないことは、新しい恩顧主義がこれまでずっと作動してきたわけでもなければ、〔政治システムの〕永続的安定性を保証してきたわけでもないことである。というのも、それは長年にわたりキリスト教民主党の権力を固めてきたにもかかわらず、同党が想定した受益者の眼からみれば、全くといっていいほどその権力を正統化してこなかったからだ。とりわけ、新しい恩顧主義はその内部に相対立し膨張する圧力をもたらし、その圧力はひるがえって幾つかの水準でイタリア政治システムに強力で継続的な不安定効果を有してきた。

それゆえに、恩顧主義の理解にあたり重要なことは、その効率性ではなく、過去10年以上にわたりその作動に伴ってきた危機なのである。後者の原因を見い出すことは難しいことではない。政治と市民との関係という水準で、恩顧主義は能動的市民となりえた歴大な〈主体〉を排除しつつける。もっとも、政治的パトロン階級の排他的地位を保持するために、恩顧主義というものは有意義な参加のどんな試みも阻止しようとする。かくして、新しい恩顧主義は真に現代的な政治行動の有する自己主張を妨げることで、市民社会を無力化し、そうして支配的諸階級に途方もない代償を余儀なくするのである。

社会的に病^{ノン・プロダクティブ}理的な数多くの容態〔features〕を含む政治スタイルを永続化することにより、またすでに断片化した社会に存する分割線を増殖することによって、恩顧主義は、地方でも中央でも、主として支配的諸階級の統治と特権を確保することに奉仕する。恩顧主義は、依存的周縁部でも全国的中心部でも、経済的や政治的な指令舵を統御する人びとに最も有益で

ある。DCの大衆的基盤を形成する諸個人や諸集団、諸階級が、恩顧政治を通じて、少なくとも部分的な利害（雇用、賃上げ、営業許可証、建設許可、公営住宅への入居など）の充足をうることは、疑いの余地ないところだ。しかし、これらの利害は大衆の中の諸個人や諸集団を相互に敵対させる過程を経ることによって保証されるのであり、そのことは一般に利害の共有を支柱にした大衆を永久に結集させないのである。どんな場合も、恩顧主義システムを通じて満たされるこれらの利害は、明らかに支配的諸階級の利害に従属する。新しい恩顧主義は労働者達を分断し、地方と中央のブルジョアジーに利する市民社会の協調主義的タイプを生み出してきた。

DCによる地方権力の管理は、恩顧的策謀というようなものではない。それは、地方的文脈で支配的な地位を有する諸集団と諸階級との結合としてわれわれが認識する権力ブロックの利害を直接に充足化するという問題にすぎないのである。まさにその発端からして、DCはカターニャの支配的諸階級に奉仕する道を取り―彼らから見返りを受けとるべく、自らを彼らと結びつけたのだ。

〈訳者付記〉

本試訳原文は、S. N. Eisenstadt & René Lemarchand, eds., *Political Clientelism, Patronage and Development*, SAGE, 1981, 所収の Mario Caciaghi & Frank P. Belloni, "The 'New' Clientelism in Southern Italy: The Christian Democratic Party in Catania," である。同書は、政治的恩顧主義に対する近年の新しい分析視角とその成果を示すものといってよいであろう。というのも、同書は、R, マルシャンの政治的恩顧主義理論に関する自己批判的再検討論文及びS, N, アイゼンシュタット = L, ロニガーによるこれまでの恩顧主義研究の理論的総括と新視点提示論文、ロニガーによる膨大な研究文献解題の他に、ヨーロッパ諸国（イタリア、フランス、ポーランド）と第三世界諸国（メキシコ、ペルー、トルコ）における恩顧主義の分析論文からなるからである。

ところで、訳者はイタリア政治（史）研究を専門にしているわけではな

い。それにもかかわらず、丸山優日本福祉大学助教授のご教示をえながら、あえてここにイタリア南部の政治的恩顧主義を分析しているM. カチャッリ = E. P. ベッローニ論文を試訳することにした動機は次にある。

訳者は、本誌の第29巻第3～4号で「政治的クライエンテリズムの序論的研究(上・下)」を行った。同拙稿で訳者は、新しい研究視角を集団理論的接近から交換理論的接近への転換と捉えた。と同時に、そうした理論転換の文脈の中で、明治維新以降の日本近代化過程における戦前・戦後の中央・地方関係と政党政治―昭和戦間期の政党政治中断をはさみながらも―は、政治的恩顧主義の視角からそのタイプ転換として捉えられる側面を有しているのではないかという問題意識を示した。

しかしながら、訳者拙稿は、政治的恩顧主義に対する二つの接近法の特徴とそこに含まれる理論的問題の検討に終始し、日本の歴史的、具体的事態については全くといってよいほど触れることができなかった。そこで訳者は、現在、日本の近代化過程における政治的恩顧主義に眼を向け、まず明治末期から大正・昭和初期のそれを分析しようとしている(拙稿「明治国家体制と政治的クライエンテリズム(ノート)」『中央大学社会科学研究所報告』発表予定)が、他面、戦後の自民党によるきわめて恩顧政治的特性も分析したいと思っている。

さて、周知のようにG. サルトーリは大戦後のイタリアのキリスト教民主党(DC)と日本の自民党はまるで双生児であるかのようだとした。もっとも、両者の相違点も指摘しているのだが(岡沢憲芙・川野秀之訳『現代政党学I』)。それはともあれ、近年改めて、戦後自民党政治は伝統的社会から解放された有権者の〈草の根タカリ主義〉に应运してきたとされている(居安正『政党派閥の社会学』、同『自民党―この不思議な政党』など)。自民党政治に対するこうした分析は、訳者からみると、どうも戦前的な名望家の恩顧主義ではなく、政党を基盤にした大衆恩顧主義へ変質してきたことを指摘しているように思われる。いや、そこにサルトーリがいうDCと自民党との双生児性の基盤があったのではないか。だとすれば、DCの恩顧政治は自民党のそれを分析するために大きな示唆を与えることになろう。その点で、カチャッリ = ベッローニ論文を注目することになった。散見するところ、同論文はカターニャDCを素材にしながら、政党を基盤

にした新しい恩顧主義ないしは大衆恩顧政党の構造と機能の特徴を具体的かつ適切に分析しているといえるからである。これが、戦後の自民党政治—そこにおける恩顧主義—の分析に先立ち、同論文の試訳を行った動機である。

ところで、本試訳論文の所収書には、またJ. チャブによるイタリアのパレルモとナポリの恩顧主義分析論文も収録されているが、その二論文はカチッチャリ＝ベッローニ論文に対する批判視点を提示している。チャブによれば、今日、政治的恩顧主義分析の前提とされているのは＜資源基礎モデル＞であるという。すなわち、それは恩顧政治の存続と拡大の基礎が特に膨張する公的資源にあるとみなし、そうすることによって経済的危機には恩顧政治が停滞ないし死滅すると結論づけがちであるが、事実はそのようなものである。確かに、カチッチャリ＝ベッローニ論文には一明らかにL. グラツィアーノの交換理論に依りながら—＜資源基礎モデル＞的側面が看取される。丸山氏によれば、カターニャ大学の研究者間でも、カチッチャリの分析枠組はあまりに図式主義的で部分的にしか同意しえないとされているという。それを克服するポイントの一つは、恩顧政治に利用される資源の類別化の仕方にあると、訳者には思われる。

最後に、本試訳にあたり、すでに述べたように日本福祉大学の丸山優氏に貴重なご教示をいただいたが、それを踏まえて試訳上の幾つかの注意を付記しておく。第一に、そもそもクライエンテリズムとその関連語の訳であるが、日本では＜利益誘導＞概念を除けば、必ずしも適訳語が定着しているわけではない。しかし、だからといってすべて音字表現にするのは訳文を煩わしくするだけでなく、音字表現が難しい関連語もあるので、これまでかなり使用されてきた恩顧主義や恩顧的などの訳語を当てることにした。第二に、試訳でもあるので、明らかに誤植と思われる場合や語句を補った方が理解しやすい文脈の場合には、それを〔 〕で示した。第三に、紙幅の関係上、著者達の注記はすべて省き、参考文献についても最小限を訳注として付記することにした。それを訳者による他の訳注とあわせ、以下に列記する。

（訳注1） Weingrod, A. (1968), "Patrons, Patronage and Political Parties," *Comparative Studies in Society and History*, 10 (3): 377-400.

Tarrow, S. (1967), *Peasant Communism in Southern Italy*, New Haven: Yale University Press.

(訳注2) Graziano, L. (1976), "A Conceptual Framework for the Study of Clientelistic Behavior," *European Journal of Political Research*, 4 (2): 149-74. もっとも、同論文とほとんど変らない原論文が、1975年、米国コーネル大学国際研究センターの西欧社会プログラムで発表され、それが河田潤一教授によってすでに訳出されている(『『恩顧主義』(Clientelism) 研究の概念枠組』『甲南法学』, 第18巻第1・2号)ので、グラツィアーノの引用文訳はそれをそっくり借用した。

(訳注3) 原文では、DCについて様々な表現をしているものの、特にカターニャ市レベルのDC(支部)と県レベルあるいは県内のDC(支部)を必ずしも厳密に区別して使用しているわけでもないようだ。しかし、文脈上、明らかにカターニャ市レベルのDCを示す場合にはカターニャDC及びカターニャ党とし、それ以外はカターニャのDCとした。丸山氏によれば、県は市と異って選挙制の議会をもつ自治体ではないため、カターニャ市長は逆にカターニャ県知事よりはるかに強大な権限と威信を有し、したがって、政党レベルでもカターニャ市DCの代表者はカターニャ県DCの代表者でもあるという。だとすれば、カターニャDC=カターニャ党は一種の地方独立党的色彩をもつと同時に、あえてカターニャのDCというように区別だてする必要もなく、それは事実上、カターニャDC=カターニャ党を示すといってもよいかもしれない。

(訳注4) このピラミッド構成のそれぞれの水準については、本文中でも説明されているが、丸山氏のご教示による説明を付記しておく。最末端の大衆的な平党员は党運営に参加しない—ちょうど自民党の名簿党员のような—名目党员である。その上に、彼らの「党员長」「党员代表」としてのカピ・テッセラがくる。党员証を保有する者の長たるこのカピ・テッセラこそが実質党员で、平党员を操作動員する「活動家」「実働部隊」である。そして彼らは地区支部書記(ないしは支部長・副支部長というような支部役員)に統轄されながら—DCに限らずイタリアのどの政党も市町村内の地区を組織の基本単位にする—管理者レベルの派閥へと結びつけられる。管理者は、通例、国会議員、州会議員、ヨーロッパ議会議員、市参事会員(日本の市会議員に相当)などの議員層からなるという。

(訳注5) このドロテーイ派についても、丸山氏のご教示を付記しておく。周知のようにDCは戦後、デ・ガスペリによって指導され、戦前の旧人民党员でローマ教皇庁に近い名望家達に支配されてきた。しかし、1954年6月、ナポリ大会でファンファーニが党書記長に選出された後、党改革が行われ、名望家に代って若い党官僚が党中枢を占めるようになる。そうして、彼らに依拠したファンファーニは首相にもなり、政府と党の全権

を掌握したかに見えたのだが、その後、モーロを含む彼の支持者の一部が、ローマのジャニーコロ丘にあるサンタ・ドロテーア修道院で会合をもち、ファンファーニ派からの離別を決定したため、1959年1月、ファンファーニは党書記長と首相を辞任することになった。この時からドロテーイ派—党内クーデタ派—が強固な権力グループを構成し、今日までDCの実権を掌握することになった。しかし、広い意味では、ドロテーイ派とは、1954年のナポリ大会以後、党改革を推進して戦前の人民党系譜につながる名望家に代りDCの実権を握り続けている戦後派党官僚をさすといえるともいう。

なお、文末になるが、貴重なご教示をいただいた丸山優氏には、重ねてお礼申し上げますと同時に、文責はすべて訳者にあることを記しておく。